

Ⅳ 墳 丘

1. 墳 丘

宇土市の中心部をめぐるV字状平野の狭隘地帯、その間を通る国道3号線沿いの東側、雁回山南麓に続く丘陵南端に向野田古墳がある。丘陵尾根の方向から墳丘の主軸はほぼ南北を示している。墳丘は尾根いっばいに跨り、前方部を北にして、後円部は丘陵南端を占めている。

丘陵の自然地形を利用し、墳丘を築造している。周濠は認められない。また長い間に墳丘の変容があり、段築の姿は明確でないが、墳形実測図から推測して、段築はなされたのではないかとみられる。

現状では、前方部およびその北方尾根付近は約100㎡にわたり、また前方部は長さ30m余削平され、後円部とその北方先に残る丘陵尾根との間は広く平地化された。昭和45年8月撮影、同46年2月測図のパンフイック航業KK調製宇土市図15は、削平化の跡がよくみられる。

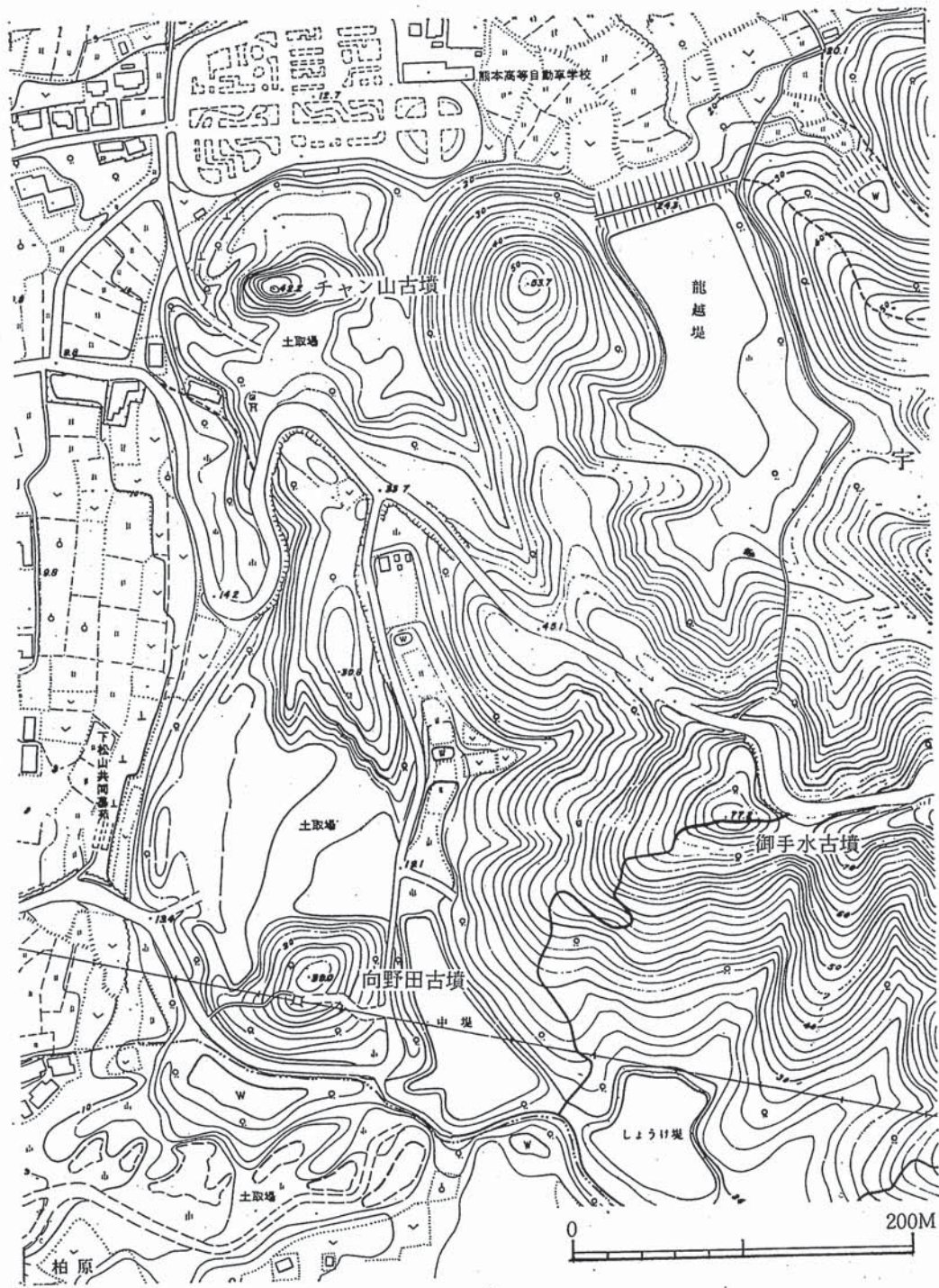
墳丘の上部および斜面は雑木林で覆われていたが、発見当時すでに西斜面はトラック道路がつき、採土で急な崖面となり、東・南両斜面は雑木林であった。

前方部存在の頃、葺石の一部が前方部前端上、前方部東北隅および前方部西側にあることが認められたが、葺石は後円部上および後円部斜面をめぐる発掘の個所にも埴輪とみられる土器片とともに認められた。葺石が墳丘全体を覆っていたかどうか、また帯状にとり巻いていたものか、局部的な発掘で明らかでない。

前方部前端上に長辺をその前端線に並行し、短辺の歪んだ、約14m×6.5mの長方形の小高い平場があり、その上に葺石の一部が残り、東南隅に葺石とともに土師器片が出土した。

昭和43年春、前方部前半が削られた際、箱式石棺1基が採土のブルドーザーにかかり出土した。出土面は黄色い土というから黄褐色の風化した砂岩であろう。棺材は採土とともに運び去られた。以上はブルドーザー運転の杉浦知治氏からの聞書であることを記しておく。上述の小高い平場付近に埋納されていたらしく、墳丘下約1mの辺にあったという。前方部にも埋葬施設が置かれていたことになる。

後円部墳頂の平坦部東南一角の雑木を切り払った時、その付近から葺石が見付かった。墳頂平坦部の葺石は墓壇の東辺にわずかしか残存していなかったけれど、墳頂平坦部には広く敷かれていたのではないかと思われる。墓壇東辺の残存葺石の間に埴輪円筒1個の底部片が出土したが、墳頂平坦部に埴輪が並んでいたかもしれない。ただ他の個所出土の埴輪円筒よりやや薄手で、淡赤褐色を呈して、異なるところがある。



第 2 図 周 辺 地 形 図

後円部の墳頂から東・南・西の3斜面にトレンチを入れ、葺石・埴輪などの所在を探した。特に東トレンチはかなり下方まで伸ばした。葺石残存のやや良好な個所は、西斜面の登り路墳頂近く左手の一個所くらいであって、他は散乱した形であった。南斜面トレンチでは墳頂から15mほど下がったところに葺石、埴輪片の散った間に口縁の欠けた壺形土器1個が直立した形で見出された。このトレンチから寛永通宝1個が採取された。

墳形実測図は、昭和42年発見当時に作成した西斜面登り路からの墳丘全体のものと、昭和44年9月後円部調査当時改めて後円部斜面をできる限り測図したものがある。

次に東・南・西3斜面の出土した葺石所在辺のコンターを記す。()内はトレンチの番号。

第3表 検出葺石一覧表

	東 斜 面	南 斜 面	西 斜 面
(a)	-5m ~ -6m(IV)	-6m ~ -7m(II)	-5m ~ -6m(I)
(b)	-7m ~ -8m(V)		
(c)	-14m ~ -15m(VI)		-14m ~ -15m

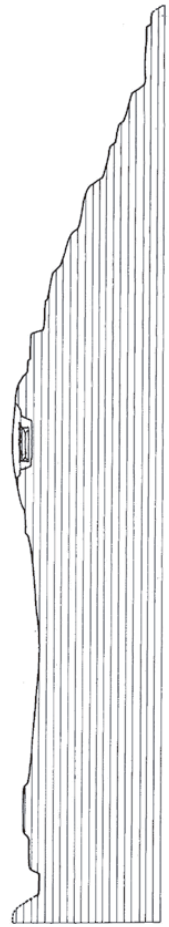
なお、後円部北側の前方部方面はほぼ垂直に削られ、その東斜面の崖面は現在6段ほど段をなして、コンターの-8m~-9m、-11m~-12m付近の崖面に葺石が露出している。

(a)の場合、3斜面ではほぼコンターの-6m辺に発掘から葺石の散布が確かめられた。後円部の墳頂近く墳丘をめぐる葺石の存在が推定される。西斜面登り路左手の、そのすぐ北側が採土で崖面となった個所は傾斜は20°ほど、幅1.5m、長さ2.3mの発掘面であったが、葺石の出土状態の比較的良好な所で、埴輪片も混在していた。

(b)の場合、東斜面のトレンチの幅3m余、長さ約6mの個所は散乱した状態で、葺石や埴輪片も混在していた。攪乱を受けたか、原位置から落下したものであろう。コンターの-7m~-8mの地点で、削られた北側東斜面の崖面-8m~-9mの露出した葺石や同じく-8m~-9mで実測図前方部前端から後円部寄り約17mの所にある葺石などとのつながりが考えられる。おそらく-8mの上方に葺石があったのではないかと推測される。ただ北側東斜面の崖面では-11m~-12m辺にも葺石が露出し、そのコンターでは他の斜面での葺石出土がみられない。その個所の葺石も、或は攪乱、落下したのではないかという疑いがある。それにしても墳丘上から下方に当たることが注意される。

(c)の場合、東西両斜面で-14m~-15m辺に、東斜面のVIトレンチで葺石が検出され、同じコンター辺で西斜面の登り路左手の崖面近く葺石が採土で露出した。(b)の場合よりさらに墳丘下方となる。東西両斜面の裾近くにも、葺石が一部見出され、西斜面で登り路にある。葺石の斜面落下が考えられるが、なお追究の要があろう。

葺石は長さ10cm余の不整形な自然石で、後円部の墳頂や斜面に丸味をもつ角閃石安山岩およ



第3圖 填丘測量圖

び砂岩の小片などが目立つ。角閃石安山岩は網津川の山地に分布している^①。

墳丘は丘陵尾根の自然地形を利用し、築成している。前方部が失われたけれど、その際風化した黄褐色砂岩や赤紫色泥岩が地形の基盤をなしていた。こうした岩石は、向野田周辺の古墳立地からも観察される地質時代中生代末の上部白亜紀の堆積岩で、約7千万年続いたとみられている^②。宇土半島が火成岩を主とするのに対し、国道3号線以東は堆積岩がひろがり、地質的な対照を示している。なおこの砂岩・泥岩の層に葺石となるような安山岩は含まれていない。また葺石は削られた地山に接して敷かれていたとみられる。

向野田古墳後円部の発掘で、丘陵を削り、墳形を整えた場合、盛り土を運んで築成している。現状では後円部墳頂平坦部がブルドーザーに削られ、盛り土層残存の厚さは約20cm、墳頂斜面で30数cmであるが、長い間に土砂の流出が行なわれたことはまちがいない。

向野田古墳は丘陵尾根南端に後円部を置き、前方部は丘陵尾根を切断した形で、不要の土砂は墳丘の盛り土に使われたのであろう。後円部下方東西両側に用水池があり、或は築造当時盛り土のため採土したことがあったかもしれない。

2. 墳 丘 実 測

向野田古墳は、国道3号線の宇土市・不知火町境界標から、東方直線距離約215mの地点にあたる。現在、前方部は失われたが、後円部を南に、前方部を北にして、前方部に続く丘陵は北へ伸び、チャン山（茶臼山）古墳のあった所まで伸びていた。

国道3号線西側は水田地帯がひらけるが、向野田古墳から国道3号線の間も一部水田がある。向野田古墳の後円部裾西南と東側には用水池がある。また向野田の後円部裾を道路がめぐり、後円部裾道路すぐ南側は宇土市と不知火町の境界線が通っている。

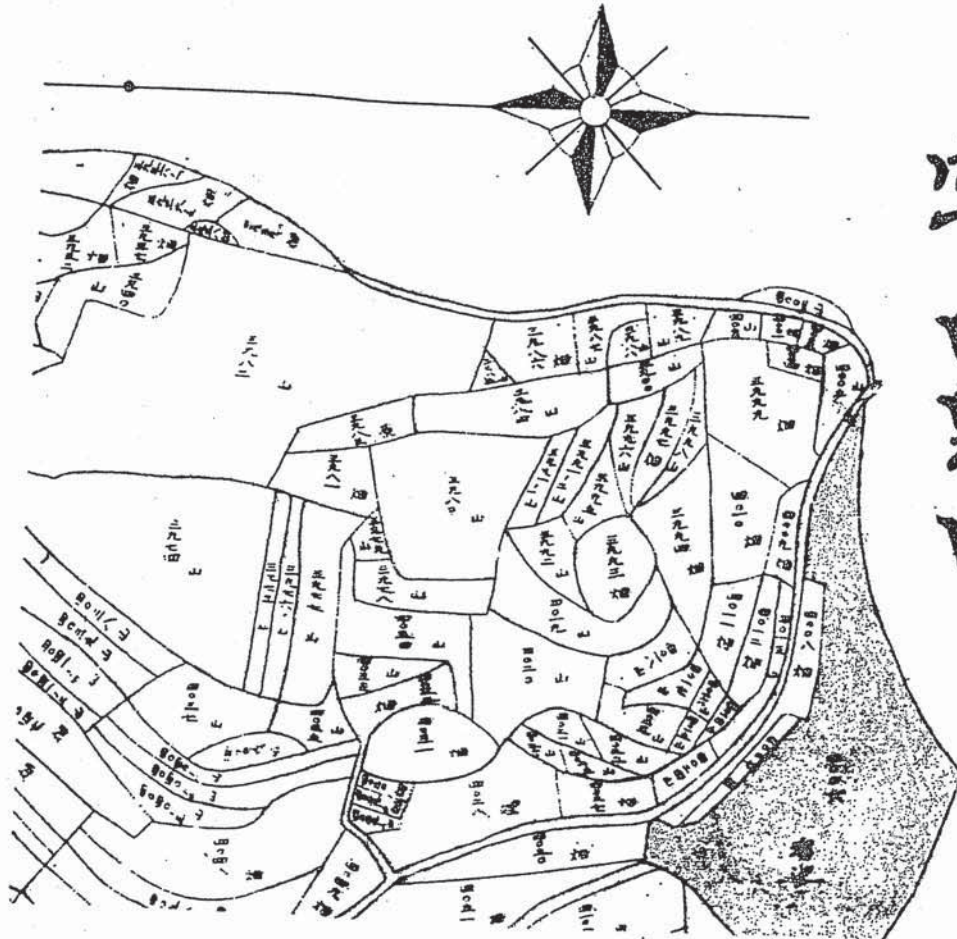
向野田古墳の発見された昭和42年6月半ばから断続的ながら土・日曜日を利用し、夏休みへかけ、採土現場の諒解を得て、宇土高社会部では墳丘の実測を行なった。

当時、墳丘の前方部西側から後円部西側の登り路近くすでにブルドーザーによる採土が進んでいた。実測は墳丘前方部の前方から後円部へかけ、さらに後円部裾西側道路辺を主とした。前方部および後円部の東斜面と後円部の南斜面は雑木林で、実測は困難であった。

墳丘前方部裾西側はトラックの道路となり、道路西側の路肩近くからかなり急な崖崩れをなし、その下方ではブルドーザーが動いていた。その崖崩れ下方の一隅に拳大の自然石がかたまっていたが、葺石の落下したものではないかとみられた。

葺石は前方部先端北西の一角4mの崖面で、前方後円墳確認当時に土器片とともに見出された。実測中、前方部先端近い墳丘上3mの辺に長辺の前方部前端に並行したやや歪んだ長方形の高みがあり、その東南隅で葺石とともに土師器片があるのに気付いた。調べたが、器形

字向野田



第 4 図 字 向 野 田 (部 分)

は壺形土器のようであった。その出土地点は地形実測図に入れてある。実測図をみると、前方部東斜面で、前方部先端から南へ約17m辺、-8mの所にも葺石らしきものと記されている。葺石は後円部西斜面で-14mと-15mの間、登り路西側崖面近くにも実測された。また登り路のかなり下方で、登りだしてすぐの所にも葺石らしいものがある。余りに下方なので、或は落下したものではないかと思われる。

後円部の墳頂は円形のようにだけれど、東西にやや長い歪んだ楕円形を呈し、長軸約12.2m・短軸約16mの平坦部をなしている。おそらくもとは円形をなしていたものであろう。後円部西南-2mと-4mの間に九州電力の鉄塔が立っている。

墳丘実測を通して、前方部前端は多少歪みながらも-4m前後で東西に細道がつき、前方部

切断の形をなしていたことが分る。また後円部は丘陵尾根突端を占めている。丘陵尾根を利用し、墳丘を形成したことは明らかである。後円部墳頂の高さは、国道3号線から宇土市一里木へ通ずる県道に入ってすぐ道路右側にある水準点5.6mの所から計測したところ、標高37.35mある。

墳丘は前方後円墳であるけれど、実測図で知られる通り、かなり変形を受けており、前方部前端東北の一角にいわゆる段築の痕跡をわずかにとどめている。

第4表 向野田古墳墳丘計測数^③値

墳丘長	後円部径	前方部幅	後円部高	前方部高	備考
89	55	35~38	9	6	熊日調査
86	52	39	9	6	松本計測

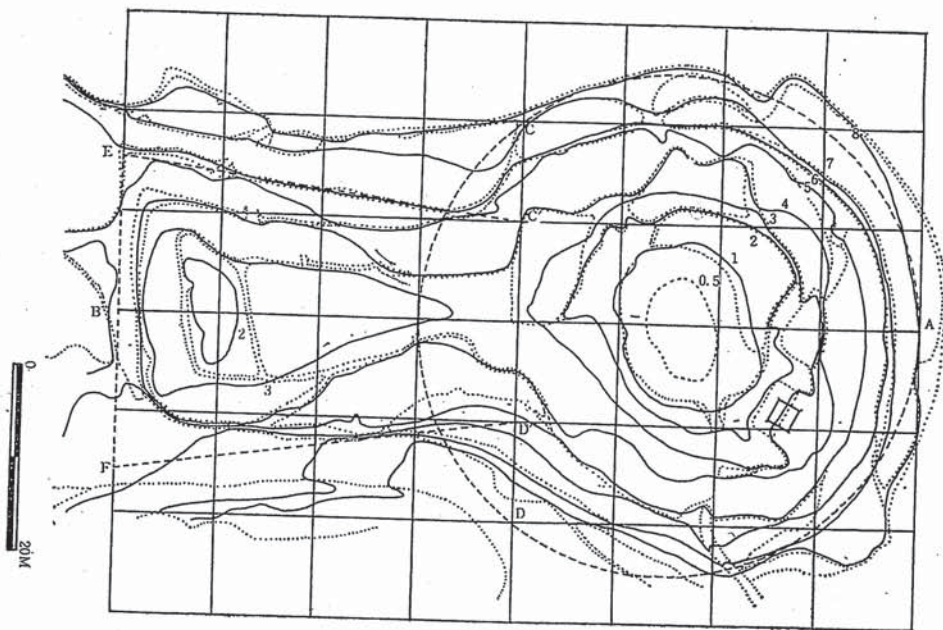
梶国男氏の方法により、墳丘長を8とした分割比からはどうか、あらためてみた^④。

墳丘長を89mとして、墳頂平坦部の中心点を推定し、後円部径55mの半径27.5mで円を描くと、実測図後円部の東端および南端の2点を通る。後円部西端の辺はかなり変形して、明らかでない。墳丘の中軸線墳丘長を8分割すると、1区画の長さ11.1mほどになる。もし1区画11mとし後円部径55mを割ると、5区画近くなり、前方部に8分割した3区画が残る。

前方後円墳の三設計型のうち、日葉酢媛陵型設計と似ている。

前方部幅35m~38m、また39mについて、実測図前方部-7mのコンター辺をとれば、39mほどとなる。しかし前方部-7mのコンター辺となれば、前方部の墳丘が墳丘のある丘陵尾根にまたがるような形となり、おかしいようである。前方部-5mのコンターにふれ、前方部東側で-6mのコンター辺は、ほぼ地形の線に沿う。また-6m辺では後円部の東・南・西の三斜面に埴輪片の散在がみられた。-6mコンターに添う地形の線が-5mのコンター辺とふれ、そこから推定し、前方部幅33.5mを計った。前方部幅33.5mの場合-6mコンター辺の平面上にある前方部前端の墳丘は前方部切断の形としてうなずかれる。その場合、前方部の墳丘は丘陵尾根にまたがったりしないであろう。前方部切断の形はそうみるのが自然なように思われる。そうすれば、後円部の墳丘は-8mのコンター辺にかかるので、中軸線の通る墳丘は北から南へ傾斜することが注意される。後円部の高さ8m、前方部の高さ4mある。

墳丘長を86m、前方部幅を33.5mとし8分比の計測によると、後円部径53.75mとなり、またAB:CD(C'D'):EF=8:4(2):3.1弱を示し、日葉酢媛陵型設計と似ている。なお前方部幅33.5mの場合前方部は3段、後円部は4段の築成ではなかったかと思われる^⑤。梶氏の方法を十分理解したわけではなく、興味をもち、ひとつの試みとしておく。ただ畿内の大前方後円墳の設計型から肥後方面の前方後円墳をみることができるかどうか、問題がある。



第 5 図 墳 丘 企 画 推 定 図

向野田古墳は前方部が消滅してしまった現在、前方部については、この実測図が唯一の資料となっていました。

梶国男氏から次のご教示をいただいた。^⑥

「お問い合わせの件ですが、設計技法というような単純で効率高いものは畿内系かそうでないかにかかわらず普遍的に使われているように思われます。最近、武蔵国の成立過程を前方後円墳の設計型から研究し、50枚余の論文にしましたが、畿内と同じように三設計型がみられました。しかし畿内にもっとも多い定形の応神陵型設計古墳がみられず、定形型成立直前の小那辺古墳と同形のもの（群馬県太田市の天神山古墳など）がみられるだけです。そして日葉酢媛陵型設計の古墳が長期間にわたり、その中の新しいものには、応神陵型古墳にみられる濠をめぐらしていたり、応神陵型古墳に横穴式石室がみられたり、後進的現象が認められます。また文化を畿内より受け入れた地域ですから、受けいれきれなかったことなどによるローカル性もみられます。しかしかなり武蔵国の成立過程をつかむことができた、自分では思っておりません。富樫さんがお住まいの土地は関東とちがって、先進文化地ですので（福岡や佐賀よりは少しわきに寄っておりますが、）どのような研究結果がでてくるかたのしみです。普遍性とその

中における個別現象をどう読むかということが大切のように思います。

西都原の柄鏡型の古墳は桜井茶臼山古墳とは似て非なる設計型で新しいもののおもわれまます。それから8設計型に細分したうち、Ⅵ型とⅦ型の関係だけはまだつかみきっていないことにご留意ください。」

日葉酢媛陵型設計の古墳が長期間にわたるといことは、その設計が広く用いられたことを窺わせ、向野田の場合、竪穴式石室に舟形石棺をもつものであることは構造の上からも編年の手がかりの一つとなる。

- 註 ① 葺石について、宇土高校渡辺富士男教諭の鑑定による。同教諭と向野田古墳の墳丘葺石および周辺の岩石を視察した。なお、熊本市立博物館による葺石の鑑定も同じであった。
- ② 「地形説明書」国土調査、経済企画庁・熊本県、1958。「熊本県地質図」熊本県、1962。「人類以前の熊本」郷土の地質、熊本日日新聞社、1964
- ③ 熊日調査は「熊本日日新聞」向野田古墳学術調査とその成果、1969. 9. 25付。松本計測は「古代アジアと九州」古墳文化と大陸 表2、1973
- ④ 梶国男「古墳の設計」築地書館、1975
- ⑤ 向野田古墳の計測中、梶氏の方法により推定復元された熊本県御船町長塚古墳の例があることを知る。（「久保遺跡」熊本県文化財調査報告第18集、1975）校正中、古墳の企画性について他の方法があることを知る。（「考古学ジャーナル」No.150、1978）
- ⑥ 梶国男氏の1978. 2. 23付私信による。

V 内部主体の構造

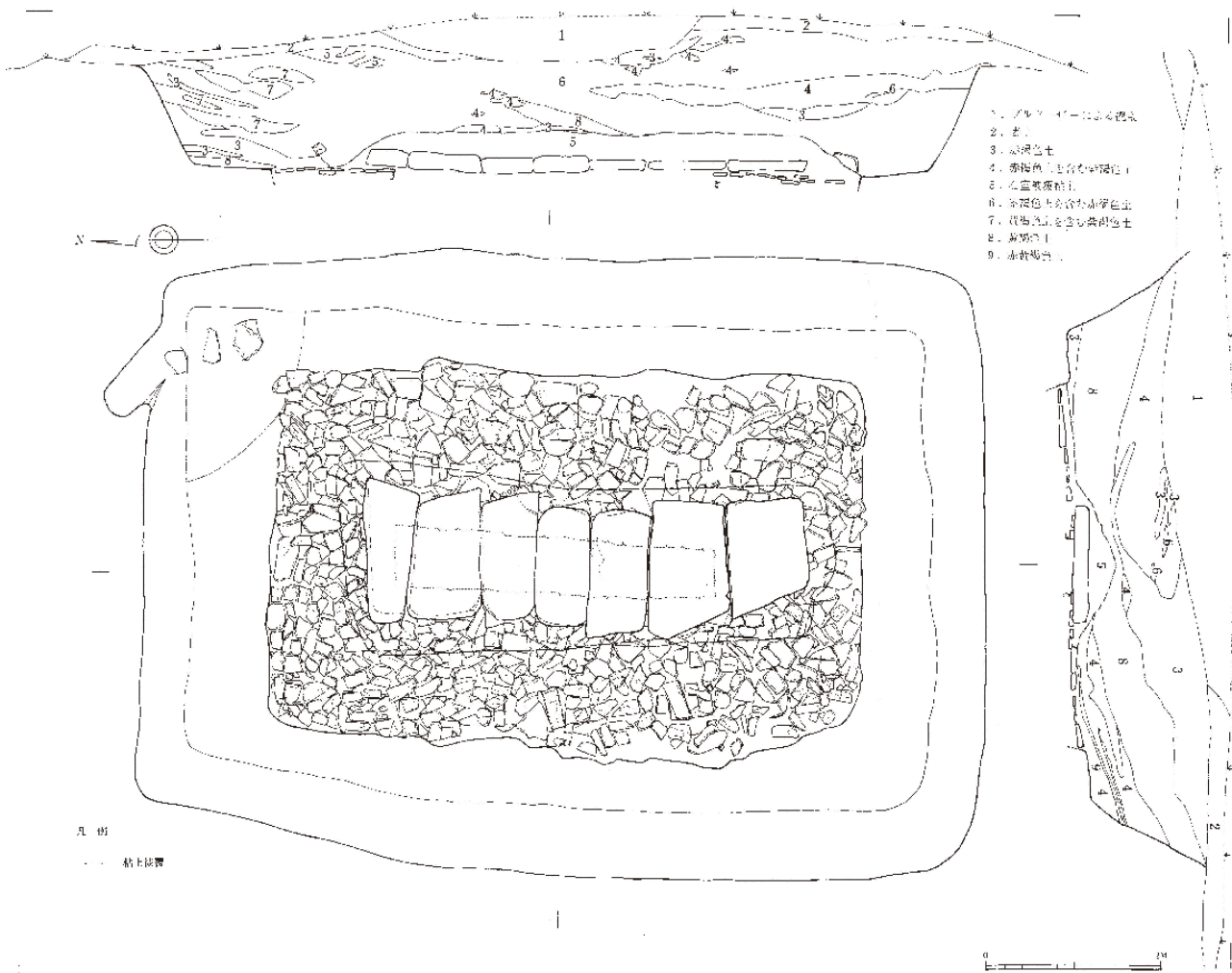
1. 墓壙・石室・石棺

後円部墳頂の平坦部は、もと円形をなしていたとみられるが、現状は変容して、東西約12.2 m、南北約16 mの楕円形を呈している。墓壙は墳丘主軸と並行している。その中央辺はやや高くなっている。はじめ、平坦部中央に十字形のブリッジを設け、発掘したとき、東・西ブリッジの断面でブルドーザーに削られた中凹みになった厚さ約10 cmの表土下に赤紫色の土層と、さらにその下に黄褐色の土層の厚い2層が目立った。この2層は風化した泥岩と砂岩の破碎したもので、黄褐色の土層は日の光で金色に輝くように見えた。その黄褐色の土層の下に蒲鉾形の粘土被覆があった。南北ブリッジの断面最下方に蒲鉾形粘土被覆の半分が細長くあり、その下の竪穴式石室の主軸方向が南北であるのが窺われた。粘土被覆の周りは板状割石がほぼ長方形に敷かれて、板状割石の周りは、東西両側で幅50 cm余、南北両側で幅80 cm余の平らに削られた地山がやや歪みながら帯状にとりまく。墓壙の深さは、現存表土から深い所で約1.7 m、浅い所で約1.3 mあり、墓壙中央部では1.7 mを越えていたろう。墓壙内斜面は逆台形を呈し、斜面の傾斜は東西、南北とも60°前後ある。

墓壙床面東北隅は墓壙の内外に上り下りするため盛り土がなされ、3個のほぼ長方形の踏石が出土した(第7図、図版5)。3個の踏石上方は階段状に掘り込んだのではないかとみられる。そして前方部上へ続いていたものと想像される。踏石は最下段が一辺36 cm・厚さ12 cm、中段が一辺39 cm・厚さ8 cm、上段が一辺32 cm・厚さ12 cmある。

墓壙床面で、粘土被覆をはいだとき、北端の天井石西側の板状割石上にうすく粘土が塗ってあり、その上に黒い炭化物があって、さらにその上にうすく粘土が覆っていて、その粘土には赤色顔料がみられた。或は天井石裏面の赤色顔料がつき、また天井石と割石の間にうすく粘土が塗られたかもしれない。推測をすれば、天井石をかぶせる前に何か火を焚いたことも考えられる。3個の踏石は、墓壙内へ上り下りに用いられ、また火を焚いた跡はわずかであるけれど、埋納の儀礼とかかわりがあったかどうか、痕跡だけでは臆測にとどまる。福岡市老司古墳では、墓道とともに竪穴式石室へ横口式に踏石のつく例があげられる^①。最近、長い墓道が熊本県城南町塚原古墳群でも確められている^②。向野田の場合は、墓壙床面への上り下りの踏石として注目される。踏石の石材は泥岩で、風化してもろくなり、角はやや崩れる。

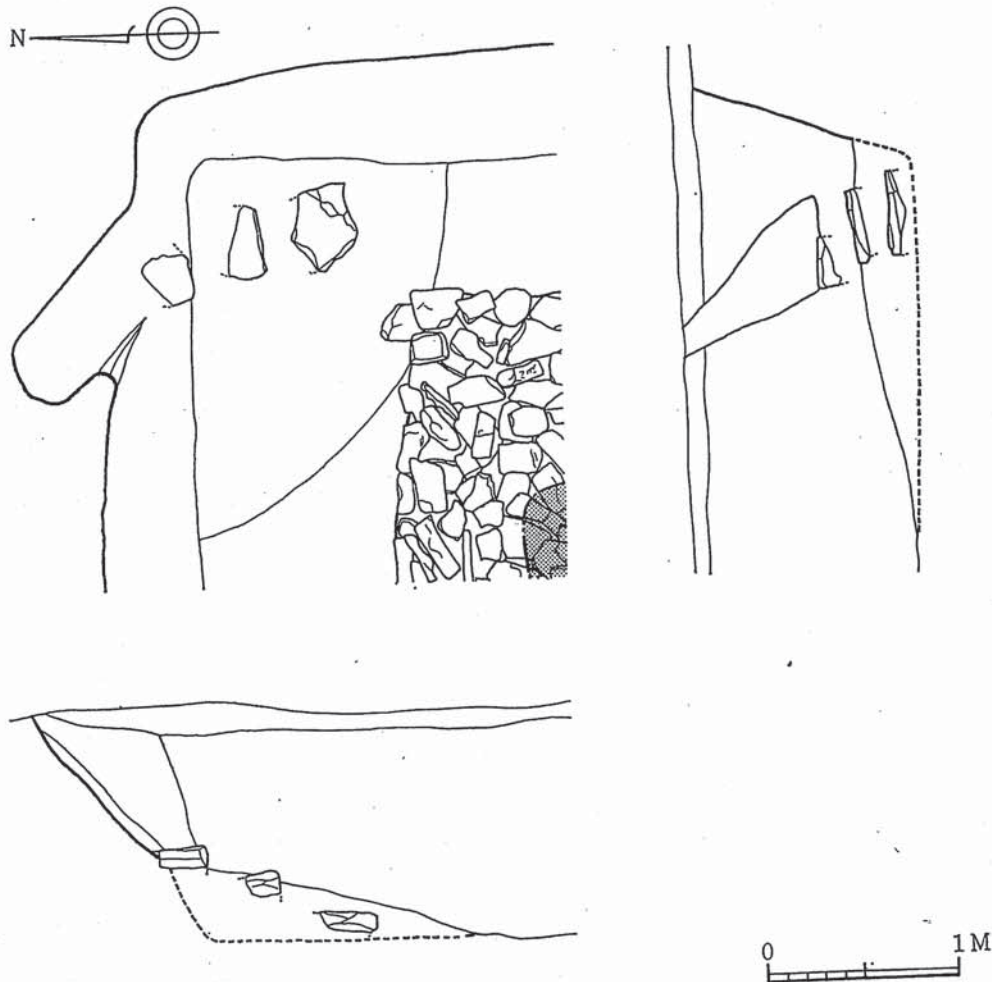
墓壙の十字形ブリッジを外して、排土の後、蒲鉾形の粘土被覆があらわれたとき、その形は両端へややひろがり、中ほどで狭まり、南端はややすぼまる様相を呈し、押しつぶされたよう



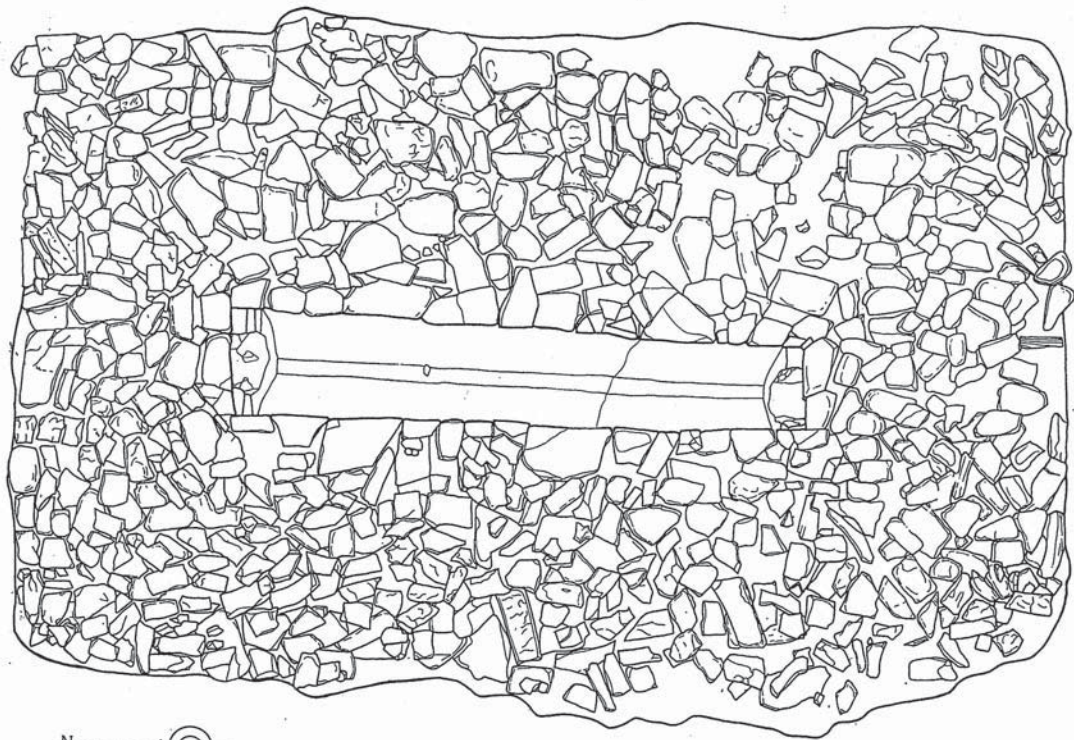
第6圖 整穴式石室 (1)

な姿であった。被覆粘土南端の先にただ1個長方形（長さ30cm・幅26cm・厚さ6cm）の板状割石が直立していたのは異様の感がした（図版4）。何のしるしか、割石敷の上にある。何か、舵のような気もしたが、おかしい。粘土被覆の広さは、長さ約5.7m・幅北側で2.25m・南側で1.8mある。その厚さは、天井石の上で25cm~30cmはあり、良質の白粘土であった。

粘土被覆をはぐと、大きさがちがひ、短辺は不揃いだが、長辺の並行する長方形近い板状天井石が7枚ならぶ、（北から順に1番目の石長さ1m~1.34m・厚さ17cm、2番目長さ1.22m~1.54m・厚さ21cm、3番目長さ1.32m~1.4m・厚さ18cm、4番目1.18m~1.33m・厚さ15cm、5番目長さ1.34m~1.2m・厚さ11cm、6番目長さ1.38m~1.32m・厚さ9cm、7番目



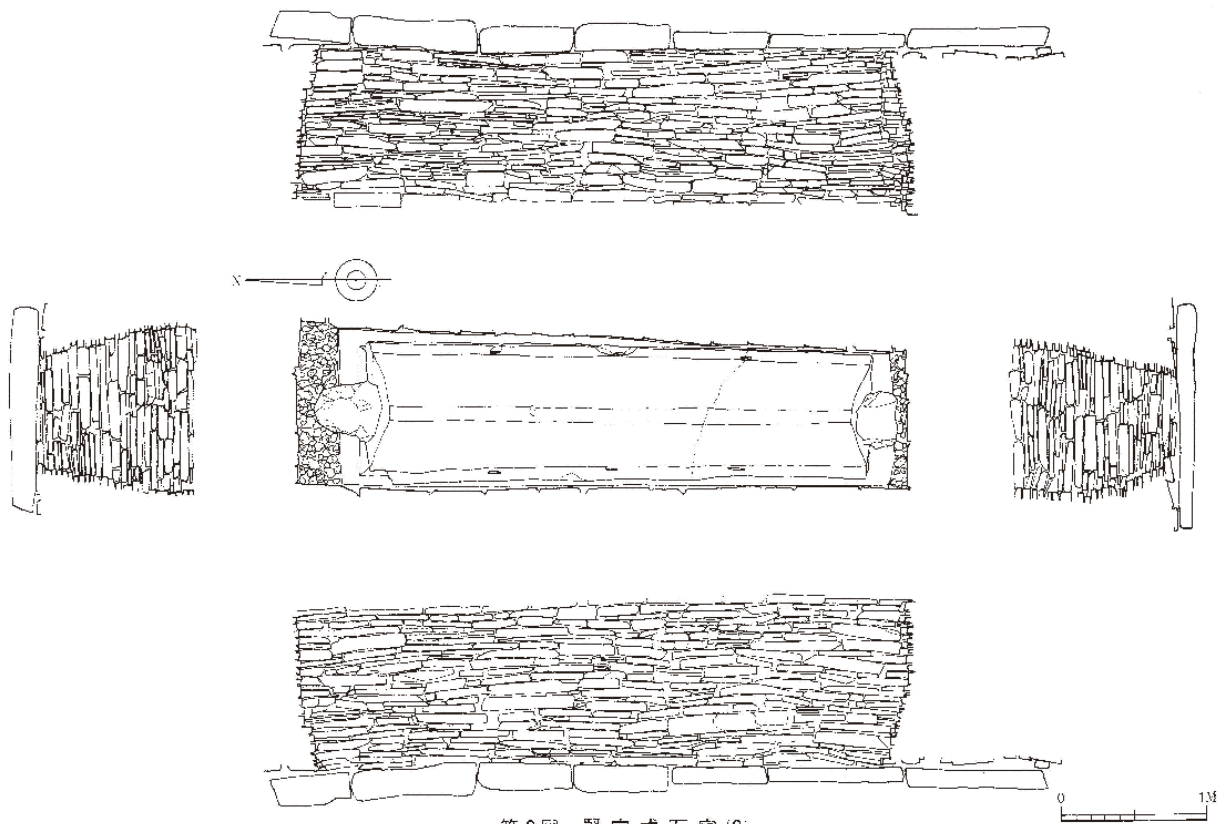
第7図 階段状遺構



第 8 图

竖 穴 式 石 室 (2)





第9圖 豎穴式石室(3)

1.48~1.5 m、厚さ12cm)裏面に赤色顔料が塗られている。石材は剝離性のある砂岩状の岩石で、すでに一部剝離したものがあつた。天井石裏面と板状割石の間は丁寧に粘土がしかれていた。板状割石の表面にカキの貝がらとみられるものが付着していたものがあつた。

板状割石の石材は、宇土半島南岸の小松から網田へかけ、その付辺の山中また海辺に産する砂岩ではないかと思われる。板状割石を使う古墳もその付近で目立つものがある。天井石の石材は、特に網田方面の山中や海辺で見かけたことがある。小松、網田方面は向野田古墳から西方图上直線距離で11kmほど離れている。

天井石をあげると、割石小口積みの竪穴式石室に長大な舟形石棺が置かれていた。竪穴式石室は上面で長さ3.84m、幅北側73cm・南側57cm、床面で長さ4.25m・幅北側1.1m・南側94cm、床面から上面までの高さ1.08m、床面は北側が南側より6cmほど高くやや傾斜している。石室の4側壁の割石は上方へ持送式に積み重ねられ、割石の隙間には粘土が詰められている。側壁の割石が隣りの側壁の割石とどう接しているか。それにより側壁割石の積み工合がみられる。石棺を置いたプランを見ると、最下部の並べかたは石棺長辺両側に1cm~4cmへだてほとんど棺壁に接して、割石がある。ことに西側は12個の割石が置かれ、その南北両端で短辺の側壁割石が喰い込んでいる。短辺両側壁の間に東側長辺側壁の割石があり、東側壁両端は長さ7cm、17cmの小さな割石が詰められる。はじめ、石棺西側から並べ、南北両側へ、それから東側へ、東側壁は最後になったと考えられる。割石の長さ、厚さはちがうが、ほぼ水平によく積み重ねられ、次第に長辺側壁の間に短辺小口側壁が喰い込んでいる。

石室床面に置かれた石棺南北両側で、北側は北側壁と棺側の間に幅約30cm、南側は南側壁と棺側の間に約10cmの空間があり、主に縦横数cmの礫石がしかれる。

墳丘の葺石や石室内床面の敷石には、角ばつたものや円味のあるものなどさまざまある。角ばつたものは主に黄褐色砂岩の割れたもので、向野田付近の山からとられる。円味のあるものは多く角閃石安山岩で、宇土半島基部北側の網津川から住吉の海岸、緑川の手海辺にある。床面敷石には、凝灰岩、カキ付の礫石もあつた。なおこの礫床の礫石は後述の通り、石室構築のとき、墓域内の石棺の周りに広くしかれたものであつた。

向野田の石棺は舟形石棺であるけれど、いわゆる典型的な舟形石棺ではない。舟形石棺は、割竹形石棺に近似するが、円筒形が平らかになり、蓋の中央に稜があり、断面あたかも扁円形を呈し、中央部やや広がっている。身の両端も垂直でなく、斜めに切られ、全体の感じが舟に似ているのでかく命名された。蓋、身ともに両端に縄掛突起が付き、時には左右側面にも付けられたものがある。身の内部には石枕が作りだされるのが普通である^③と辞典にある。

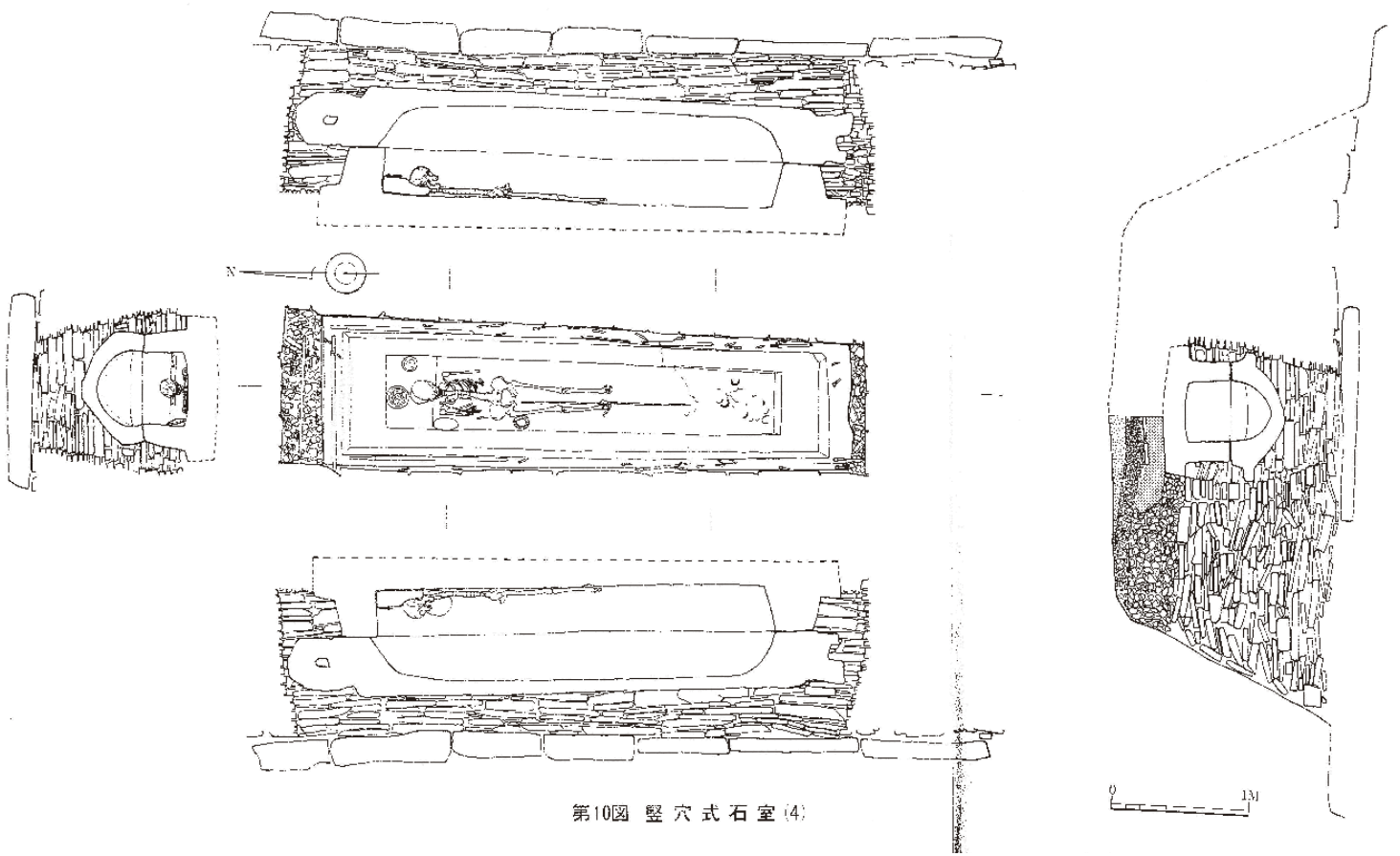
向野田の石棺を舟形石棺としてあげた「九州における主な舟形石棺出土地名表」の終りに、割竹形石棺と舟形石棺、長持形石棺、家形石棺の中には厳密な区別の困難なものがあると記されている^④。

かつて舟形石棺と割竹形石棺とに分けられたものを合わせて、舟形石棺とする見方をとり、舟形石棺の幅が前後両端でちがいの著しいことともに必ず縄掛突起があり、諸手槽の例から舟棺の理念をもって作られたとする先学の見解がある。蓋のある棺をもって蓋のない舟形の棺の変形であるとする、舟棺の理念にもとづく見方に対して有力な舟葬説批判がある。舟に似ていると見て舟形石棺とよんだのはたんなる現代の命名であるとされる。

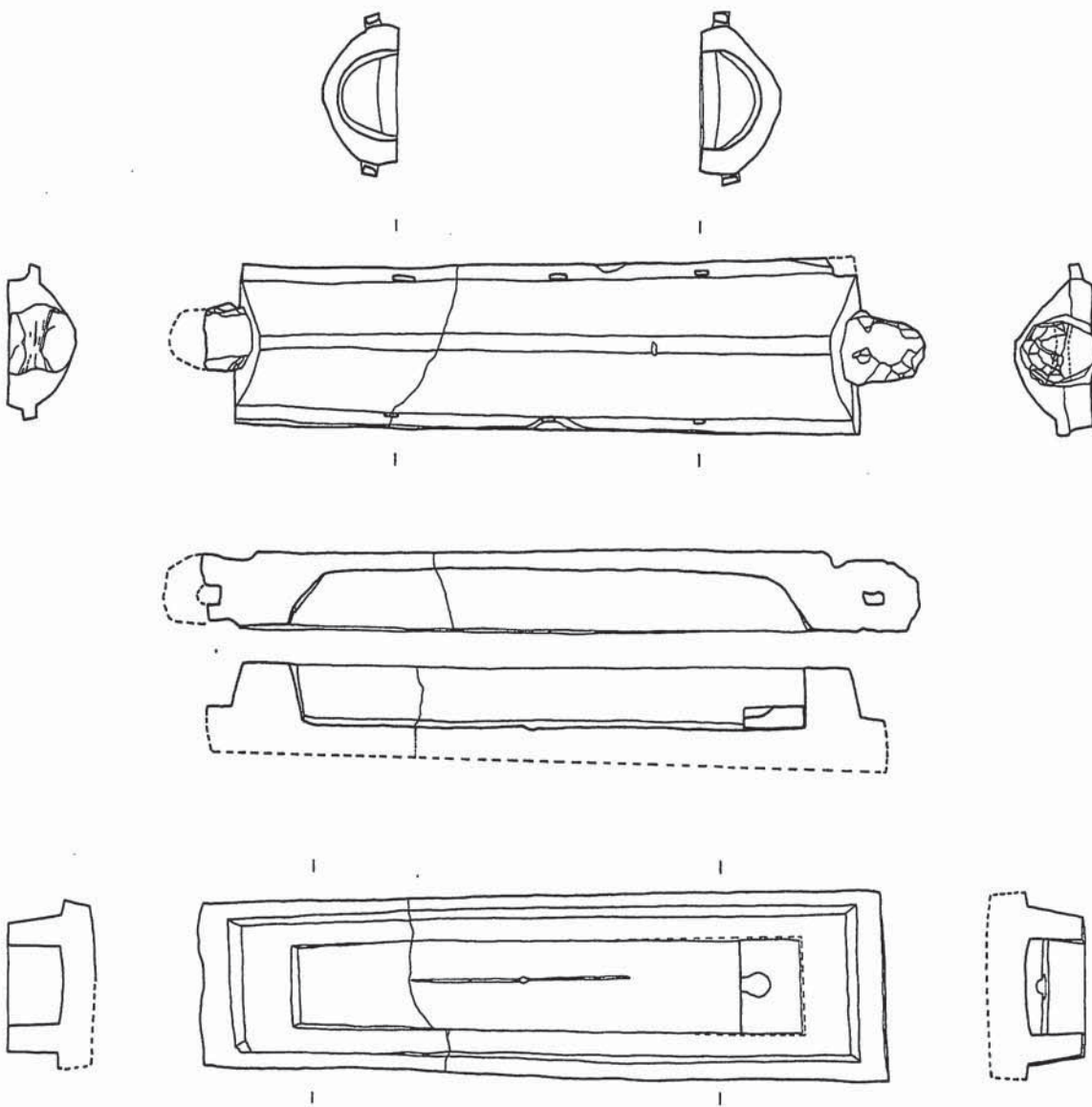
向野田の石棺の石材は阿蘇溶結凝灰岩である。現存の棺蓋は縄掛突起を含め、長さ4.0m、幅北側1m、南側87cm、扁円形の上部中央に幅北側10cm、南側7cmの稜がつき、南北両側は斜めに削られ、長辺両側に幅7cm～10cmの平縁がつくられ、両側の平縁に南北の両端から約80cmの所から70cm余おきに3個の長さ6cm～12cm・幅1.5cm～2.5cmほぼ長方形の孔がある。このような長方形の小孔をもつ例として、熊本県八代郡大王山古墳・同室ノ山古墳・佐賀市熊本山古墳の棺蓋には両側に計6個がつき、京都府綴喜郡茶臼山古墳の舟形石棺の棺身両側平縁部には計12個がついている。棺蓋は西北一角、両側平縁などに一部欠けた所があるほか、北側の縄掛突起の先端が欠損している。北側突起はプランで、長さ46cm・幅26cm～42cm、断面上部は円弧、下部は平らで、厚さ40cm、亀頭状を呈し、中央横に長さ10cm・幅約6cmのほぼ隅丸長方形の穴があき、穴は両側からあけられ、東側幅15cm、西側幅10cmで、鼓のようにくびれる。南側縄掛突起は半壊で、プランの現存長27cm・幅34cm～39cm・断面厚さ38cm、亀頭状の先端が欠失し、中央やや下横に長さ約10cm、幅約11cmの逆コ字形の穴があき、同じく両側からあけられ、東側幅18cm・西側19cmで中くびれとなる。棺蓋表面は稜・平縁のほかかなり削り跡があり、ことに縄掛突起は荒削りながらよく形をととのえている。鏝かなにかで削ったものであろう。

棺蓋裏面は刳抜きである。縦断面で高さ44cmの棺蓋に深さ約33cm刳抜き、棺蓋上部厚さ約10cm残し、両端は弧状に彫られ、刳抜き下部の長さは2.9mある。横断面では扁円形の棺蓋両側に幅8～9cm、高さ7～10cmの平縁がつき、平縁外側は斜めとなり、平縁下方は扁円形からややすぼまり、刳抜いた棺蓋内部は半円状を呈し、半円の幅棺蓋の稜下方で厚さ約10cm、扁円形の両側で厚さ約13cmある。棺蓋裏面は磨きがかかる。

棺身は台上で箱形に刳抜く。台上の北側は何故か壊われ、欠けてやや出入りのある形となる。台の現存長3.95m・厚さ約18cm・北側幅1.06m・南側幅90cmで先狭まった長方形をなし、東西両側に幅約10cm・北側に幅25cm・南側に幅14cm～18cmの出入りのある平縁をなし、箱形を囲む。箱形上面の長さ3.1m・北側幅79cm・南側幅（一角が崩れ推定）71cm、平縁面で長さ3.15m・北側幅88cm・南側幅（一角が崩れ推定）75cmの先狭まった台形の箱式となる。棺の内法は上面で長さ2.86m・北側幅52cm・南側幅45cm・深さ33cmあり、床面で長さ2.82m・北側幅54cm・南側幅45cmあり、北側では上面より床面がわずかに広く、なお上面よりわずかに北へ奥まっている。南側では上面が底面よりわずかながら広く逆台形に彫り込まれる。



第10圖 竪穴式石室(4)



第11圖 舟形石棺

0 1M

彫り込まれた棺内北側いっばいに接して幅34cm・厚さ北側13cm・南側11cmやや南へ傾いた長方形で、南側に頭部をのせるため半ば電球状に刳抜いた石枕がはめ込まれる。また棺床中央に長さ1.23m、幅約1.5cmのごく浅い溝がつき、溝の中ほどに径3cmほどの穴をあけようとして深さ約2cmの穴跡があり、棺床を貫通していない。溝の南端に棺身をやや斜めに横切ってヒビ割れがあり、溝はヒビ割れのところでとまる。

棺蓋と棺身は、棺身の箱式4側壁の上縁に棺蓋下部の箱形側壁の下縁がのり、はめ込みのものではない。なお棺内はすべて赤色顔料が塗ってある。石枕下の床面も塗ってあるが、石枕の下には塗っていない。石枕上の赤色顔料の厚さは約5mmあった。

向野田古墳の石棺に近い例として上記の八代郡大王山古墳の舟形石棺がある。同じ県内で、距離の上からもそう遠くない。

刳抜式石棺について割竹形石棺→舟形石棺→家形石棺という単純化した図式がある。軟質の石材であっても、刳りぬくには木棺の場合と異なる石工用具がいる。そうした用具は朝鮮から輸入したとみられる。刳抜式石棺の出現について、香川県快天山古墳、静岡県三池平古墳の例から4世紀後葉をさかのぼるものでないといわれる。また石棺の舟形→家形の系列も地域によりちがいが^①ある。

舟形石棺として、向野田古墳の場合、蓋が舟形で、身が箱形であるのに対して、後出とみられる福岡県天神山古墳では蓋が家形、身が舟形となっている^②。蓋と身を異にする石棺製作者の意識に伝統的な石棺形式の観念がひそんでいたことが察せられ、興味がある。

「石棺研究ノート(三)長持形石棺」に、……この造山古墳所在例(刳抜長持形石棺)は、石材が阿蘇石であり、九州的な舟形石棺の系譜の中で、特例の長持形石棺が作られたものに違いないのであるが、唐仁大塚例は、長持形石棺を意識した部分が認められず、九州的な舟形石棺の中で十分説明できる種類に属すると思う。蓋・身の短辺に縄掛突起を2個ずつつけることも長持形石棺である理由にはならないし、見取図で棺身が箱形に近くえがかれていることを考慮して長持形石棺的だというのがあれば、身の断面形が箱形を示す舟形石棺として、肥後宇土市向野田古墳例などあることをあげればよいであろう……とある^③。

向野田の石棺を、九州的な舟形石棺の系列に置かれていることが注目される。

向野田石棺の各部の特徴を各地の石棺例のなかから第15表 関連石棺一覧表(112頁)としてあげた。

(1) 石棺基底部の構造

竪穴式石室に置かれた舟形石棺の基底部がどうなっているか、今回その一部を確かめることができた。宇土地方で石室の粘土床を確かめたことはあったが、石棺基底部ははじめての試みであった。

棺蓋をあげるため、石室西側壁の板状割石を蓋石の縁辺まで外した。そこで棺身西側壁南端

の個所で、保存のこともあり、幅1mほど掘り下げ、その幅で墓壇の西側斜面まで控積みの割石をはいた。

棺身台下の断面をみると、高さ13cmの台側下方に厚さ11.5cmの粘土層があり、その下方に長さ36cm・厚さ3cm、また長さ45cm・厚さ5cmの板石が水平に続き、板石下方は拳大より小さな礫石が厚さ15cmほど層をなし、その下方はごく小さな砂まじりの砂利となる。棺身台下方約40cmで地山となる。

棺身南側で墓壇西側斜面への断面図で石室および棺身台下の構造が知られる。棺身底部は平らではなく、棺底中央は棺身の台側面より3cm下になる。棺身の台側面から水平に墓壇西斜面まで拳大の礫石が層をなし、棺身台下から35cmほどやや斜め下に伸びた粘土層を含んでいる。礫石は墓壇床面まであり、下方35cm辺から厚さ15cmほど土まじりのやや小さめの礫石の層が粘土層の下の板石下まで続き、板石下方では土を含まない締りのあるごく小さな砂利が数cmの厚さで墓壇中央へかけてしかれている。墓壇床面はその東西両側から中央へやや傾斜している。

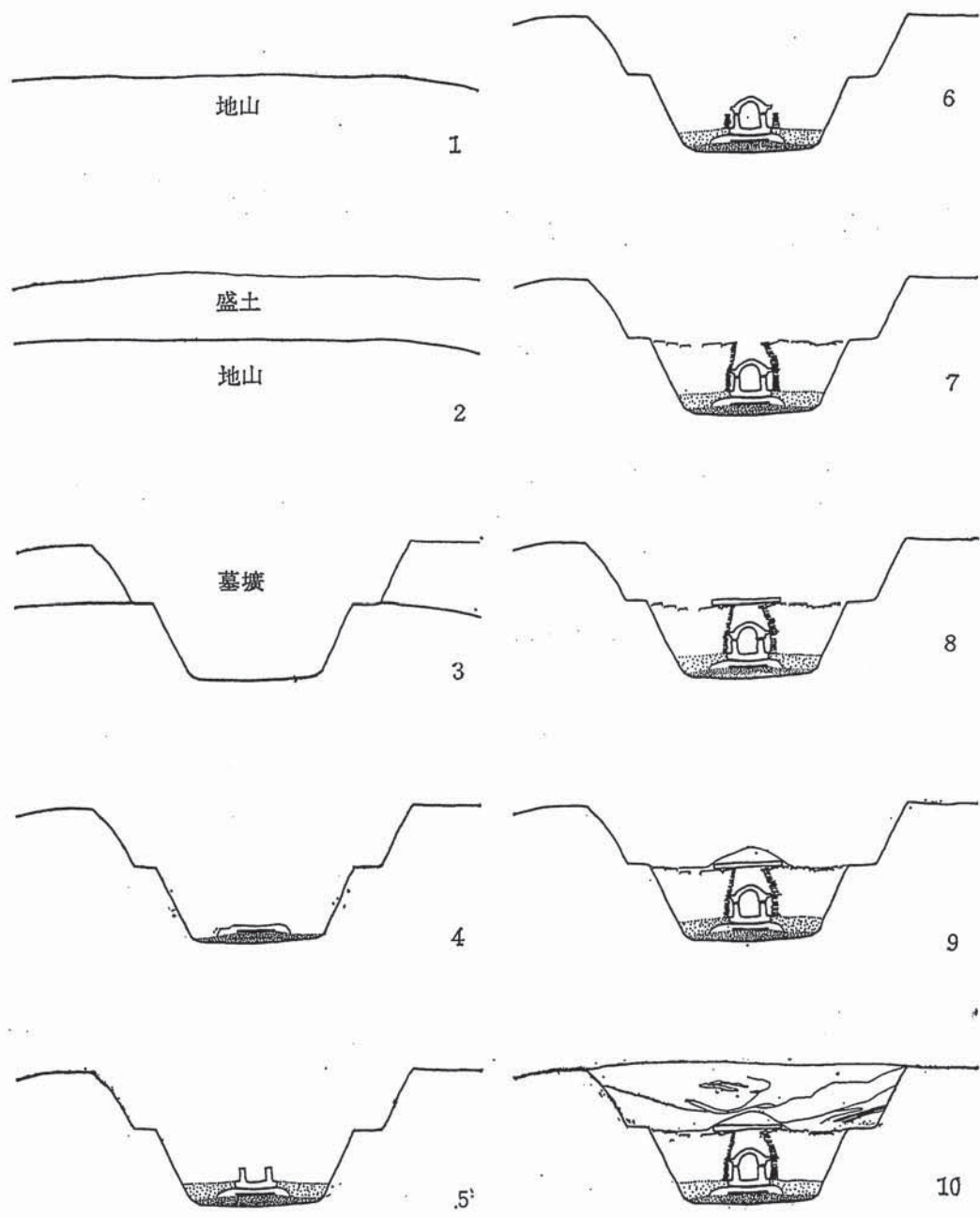
墓壇西斜面まで控積みの割石をはくと、墓壇斜面には粘土が塗られ、割石が張り付けられた形になった所もある。

棺身西側南端の石室、石棺基底部の調査であるけれど、墓壇内の構造を明らかにする手がかりを得ることができた。

排水溝の有無を確かめた所、地山に掘り込みなどのあとではなく、作られなかったとみられる。向野田の場合、墳丘とその地質、葺石、墓壇の構造、石室の天井石上粘土被覆などからとくに排水溝を設けなかったことも考えられる。

(2) 石室構築の手順(第12図)

1. 後円部に当たる丘陵南端を削り、盛り土をし、墳頂平坦部とする。
2. 平坦部中央を掘り下げ、南北長さ10.1m・東西幅北側7m・南側6.9mの長方形で逆台形に深さ1.5mほどの所で墓壇床面とする。墓壇東北隅に墓壇内外へ昇降するための足場をつくる。のちに踏石が置かれる。第1次墓壇とする。
3. 第1次墓壇床面の周りに幅約70cmの平縁部を残し、さらにその中を逆台形に床面南北長さ8m、東西幅北側5.2m・南側5.6m・深さ約1.5mほど掘り込む。第2次墓壇とする。
4. 第2次墓壇床面中央辺にごく小さな砂利をしき、その上に小さめな礫石を積み重ね、石棺の基底部となる所に扁平な板石をしきならべ、さらにその上にやや広く粘土をしきかためる。そしてその上に棺身をおく。
5. 棺身の台側面の高さまで拳大の礫石を墓壇いっばいに填める。棺身の台側面の上、填めた礫石の上に板状割石を棺身台上の箱形棺身の側壁の高さまで積み重ねる。この頃、棺内に被葬者、また棺内外に副葬品が埋納される。
6. 埋納後、蓋石がかぶされ、蓋石両側にはぼ接して割石を積み、さらに持送式に積み上げる



第12圖

豎穴式石室構築過程推定圖

とともに墓壙斜面まで割石を控積みし、第1次墓壙床面平縁部の高さまで積む。割石の空間は粘土を填め、墓壙斜面にも粘土が塗られる。

7. 竪穴式石室上に天井石を7枚のせる。天井石の上や周りを薄銚形近く粘土を被覆する。その後第1次墓壙いっばいに、はじめは主に黄褐色土を埋め、次に赤紫色土を入れ、さらに盛り土をして、墳頂平坦部をととのえる。

もし上述のような手順で石室・石棺の構築が行なわれたとすれば、棺蓋および棺身南端の欠損は、石室内に置かれる以前、なんらかの事情により生じたものではないかと思われる。石棺のひび割れが、その時できたかどうか分からない。石室が石棺より狭く構築されたため打ち欠いて置いたのではないかともみられるが、このような石室構築・石棺剝抜の技術をもつ者が、前もって石室構築を進めるに当たり、石棺の長さを誤ったとは考えられない。石棺欠損のためか、天井石の南端7枚目は石室外を覆う形となっている。天井石7枚は、最初予定したものにちがいない。

墓壙・石室の構築過程で、棺内に被葬者を納め、副葬品などを供え、葬送儀礼の後、棺蓋や天井石をのせたのではなかろうかと想像される。

なお、内部主体は異なるが、奈良県東大寺山古墳（北高塚古墳）は、標高130mにある復原全長約140mの前方後円墳で、墳丘主軸に並行の墓壙があり、その中央に粘土礫をおく4世紀後半のものである。全長1.1mの中平紀年刀で知られている。盛土をした後円部墳丘中央に、長さ12m、幅北側8m、南側6.5mの墓壙が逆台形に掘られ、途中でその東西両内壁に沿い壇を設け、さらに掘り込んだ墓壙床面は長さ9m、幅4m内外で、墓壙の深さは約3.1mある。内部主体は異なるけれど、墓壙の掘りかたでやや似ている点がある。向野田の場合、東大寺山で東西両壁の壇下の地山に玉砂利がしかれ、その上に粘土がおかれるのに対して、掘った4壁の周りに平縁部を残し、さらに掘り込んで石棺の周りから平縁部の所まで板状割石を積み上げ、竪穴式石室をなしている。古代中国の墓壙にこのような壇のあることが指摘されている^⑭。

東大寺山古墳のことから、そうした中国古代の墓壙では腰坑とよばれ、また奈良県殿塚古墳にもそれを偲ばすような例のあることを知った^⑮。

長野県森將軍塚古墳の報告に、二段墓壙として京都府寺戸大塚古墳、同西山一号墳、群馬県前橋天神山古墳、熊本県向野田古墳などのほか島根県造山三号墳が記され、いずれも古式古墳であることが述べられている。また京都府カジャ古墳例が加えられ、石棺のところであげた京都府茶臼山古墳例も二段墓壙である。それらの中に、すでに向野田古墳があげられているのであった。

二段墓壙の分布は興味があり、向野田古墳の場合、大陸に近い中九州西海岸にあることが注目される。

- 註 ① 九州大学文学部考古学研究室「福岡市老司古墳」、1969
- ② 野田・松本・島津・江本ほか「塚原」熊本県文化財調査報告 第16集、1975
- ③ 藤田亮作監修、日本考古学協会編「日本考古学辞典」東京堂、1962
- ④ 乙益重隆「古墳文化各説—九州」新版考古学講座5、雄山閣、1970
- ⑤ 後藤守一「古墳の編年研究—その三（棺の類）」古墳とその時代(-)、朝倉書店、1958
- ⑥ 小林行雄「舟葬説批判」古墳文化論考所収、平凡社、1976
- ⑦ 乙益重隆「熊本県八代郡大王山古墳」日本考古学年報11、1962
- ⑧ 佐藤伸二「室ノ山古墳調査報告書」宮原町教育委員会、1976
- ⑨ 木下之治、小田富士雄「熊本山船型石棺墓」佐賀県文化財報告書第16集、1967
- ⑩ 堤圭三郎・高橋美久二「茶白山古墳」（京都府）埋蔵文化財発掘調査概報、1969
- ⑪ 前掲書、註⑥書所収。「神功・応神紀の時代」、「家形石棺」
- ⑫ 柴田常恵「筑後三池郡上楠田の石神山」人類学雑誌第31巻第7・9号、1916
- ⑬ 間壁忠彦・間壁菫子「石棺研究ノート(⇒長持形石棺)倉敷考古館研究集報第11号、1975
- ⑭ 金関恕「卑弥呼と東大寺山古墳」古代史発掘6、講談社、1975
- ⑮ 熊本大学白木原和美教授のご教示による。
- ⑯ 八幡一郎・米山一政・岩崎卓也「長野県森将軍塚古墳」東京教育大学文学部考古学研究報告Ⅲ、1973

VI 遺物の配列

向野田古墳の副葬品は、墳丘の主軸の方向と並行した竪穴式石室内の舟形石棺の回りと舟形石棺の中、すなわち棺外と棺内に置かれている。

1. 棺外の遺物

昭和43年6月、はじめて開室のとき、石室北側壁と棺身北側の間で、石棺周りの平縁部と礎床の上に鉄器類が見出された。礎床東北隅に大小の3個の鉄斧、中央に柄を東に切先を西にした長さ約90cmの直刀1本(刀3)、石棺周り平縁部の上で東から柄付刃部と刃部がやや離れ、合わせた長さ約80cmの直刀(刀2)、その直刀の柄とT字形に柄を接し、刃部が東側平縁部へ伸びる直刀(刀1)、あとは37本を数える刀子が散乱した形であった。

石室南側壁と棺身南側の間で、石棺周りの平縁部西側で切先を南に、柄を北にした直刀の刃部1本(刀4)があり、刀子6本が散乱していた。なお平縁部の東側で何か器物の腐蝕した後の残欠とみられるうす黒い網のような表皮のある小片があった。(第13図×印)

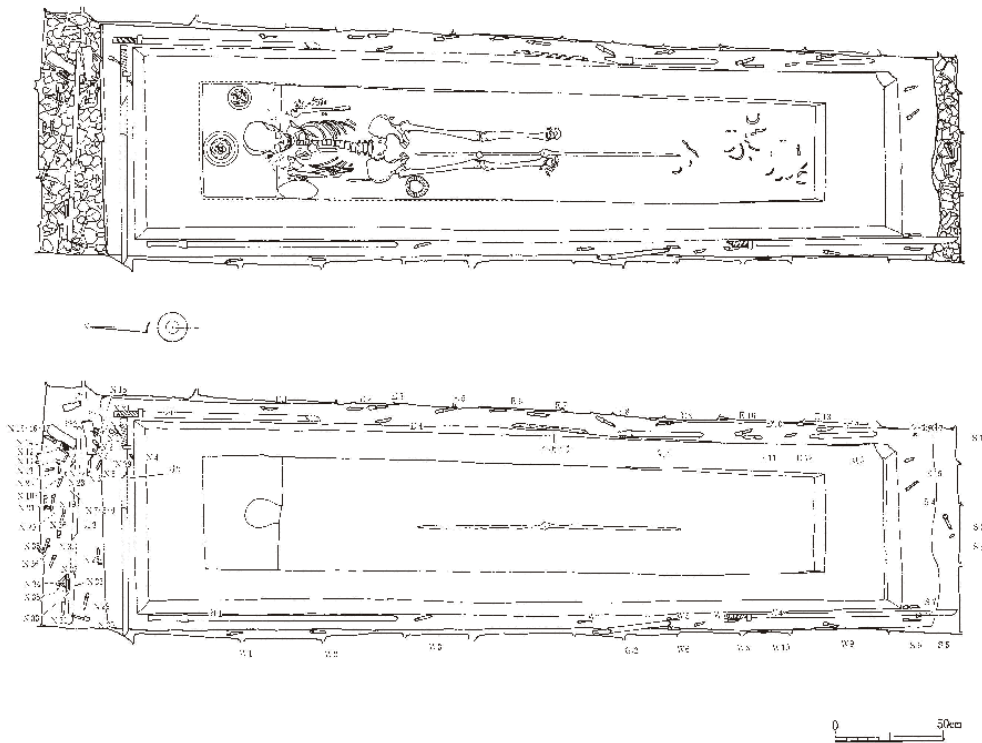
石室長辺東西両側は板状割石が迫り、石室側壁と棺身の間は見られなかった。ただ西側北端で長剣の柄がのぞかれた。

同年9月、はじめて開棺のとき、被葬者の人骨および副葬品などが明らかにされた。

測図を見ると、石室東西両側壁は石棺周りの平縁部に接し、遺物はすべて平縁部上に置かれていた。東側平縁部では北端に刃を東にした柄付刃部があったがそれに続く直刀の一部があり、長さ約1mある。平縁部中ほどに棒状の不明な木質のものがあり、また切先を南にした長さ40cmの柄の残欠のついた短剣があった。或は不明の木質棒状のものと続き、槍であったかもしれない。長さ32cm、切先を南にした短剣が東側平縁部の南端にあった。他に14本の刀子が東側平縁部にずっと置かれていた。

西側平縁部では北端に柄、切先を南にした長さ1.18cmの長剣(剣1)がおかれ、平縁部中ほどに切先を南にした長さ33cmの短剣(剣2)があり、その南端に切先を南にし、柄を北にした長さ約1mの直刀(刀4)があった。10本の刀子が平縁部にずっと置かれていた。

直刀は石室北側棺身の平縁部にあった1本(刀2)と北側礎床の1本(刀3)が石棺へ刃を向けていたほか東西両側の2本はそれぞれ刃を外に向けていた。石室側壁と棺身の間に副葬された鉄器は刀剣・刀子や鉄斧という利器や工具である点が注意される。



第13図 (上段) 棺内・棺外遺物配置状態 (下段) 棺外遺物出土個所番号

棺外に置かれた鉄製の利器や工具は、棺内被葬者を邪霊などから守護する意味があろう。

石室北側に直刀・刀子や鉄斧のあることも被葬者の頭部が棺内北側にあることとかかわりがあるのではなかろうか。

石室東西両側では、刀剣の切先は南をさし、刀子も刃の向きはさまざまだけれど、切先は東側でもほとんど南を指し、西側では数は少ないが、すべて南を指していた。仰臥伸展葬の被葬者が北枕で、顔や手足が南に向いていることとかかわりがあるように思われる。また古墳の立地の上から不知火海や八代方面への指向が窺われ、そうしたことも注意される。

なお石室西側の北端に置かれた長剣はとくに何か儀礼的にも用いられたことがありはしないかと思われる。

上述の刀・剣・刀子などにはかなり布痕がついていた。また刀剣や刀子などの柄にはかなり木質部が残っていた。

2. 棺内の遺物

棺外の副葬品が鉄製利器や工具であるのに対して棺内の鏡・玉類・車輪石・貝輪など鏡のほかは装身具であった。

石枕をした被葬者の人骨は、宇土地方で宇土城（城山）本丸跡西側出土の大形石蓋甕棺の弥生人骨以上に残存のよいものであった。この人骨の状況からみてもこの石室構築・石棺製作の技術のすぐれていたことが知られる。この人骨調査者によれば、骨盤の恥骨結合面から被葬者は女性で、推定年齢は30代の後半で、40才に近いといわれる。女性単独埋葬の確実な例としてあげられる^①。

後円部墓域内竪穴式石室に置かれた舟形石棺の棺内に石枕をした仰臥伸展葬のほぼ完形を示した人骨は、現在熊本大学第二解剖学教室収蔵庫で2個のケースに納められている。

頭部をのせた石枕上には、頭部すぐうしろ西寄りに鏡面を下にした内行花文鏡、東側内壁に接し同じく鏡面を下にした鳥獸鏡、西側枕下で西側内壁に鏡面を出し斜めに立てかけた形で下顎骨の方へ向いた方格規矩鳥文鏡がそれぞれ置かれていた。

鏡の配置は、おそらく置かれた当時の形を示しているとみられる。それは方格規矩鳥文鏡から南に40cmほど離れて置かれた車輪石の位置からも窺われる。

小形の鳥獸鏡が壁際に、中形の内行花文鏡が頭部のうしろに、さらに鏡面を顔面へ向けたやや大形の方格規矩鏡は、それぞれの鏡格ともいべき重要性をもって配置されている。大阪府茨木市紫金山古墳の方格規矩四神鏡は棺内遺骸の頭部におかれ、また福岡県一貴山銚子塚古墳^②の長宜子孫内行花文鏡や鍍金方格規矩鏡は頭辺にあった例が参考される^③。上記3面の鏡は絹布などに厚く包まれていたらしく、鏡の表面に布痕が著しい。ことに内行花文鏡の端には房々し

た布片というか糸片が付着していた。石枕上の内行花文鏡から鳥獸鏡へかけ、その間に布痕のあったことが実測図に記入されている。

車輪石は右大腿骨上端、骨盤下方に当り、大腿骨と棺内壁の間にやや卵形の長径に対し、両端のうち幅広い方を北にし、表をみせ、歪んだ形でなく、見出された。その中央孔や表面に一部人骨の石灰分かとみられる白いものが付着していた。装着していたとしてもおかしくない位置にある。ただ被葬者が埋納時に装着していたとすれば、外れ落ちるとき、位置が現状のようにきちんとなったかどうか多少疑わしい点もある。表面にわずかながら欠けたところがあり、明らかにかつて腕に装着していたことがあるとみられる。

この車輪石は、宇土地方ではもちろんはじめてのものであり、県内で鹿本町津袋大塚古墳出土の小片は円形を呈する車輪石である^④。

宇土地方の車輪石として、宇土市城ノ越古墳出土の三角縁四神四獣鏡とともに、それらが畿内を中心とする分布につながるものかどうか、またつながるとしたらどういう意味があるか、興味がある。

勾玉、管玉や小玉などについて見ると、玉類は分散し、主に上半身の周りにあり、下半身の方まで及んでいる。

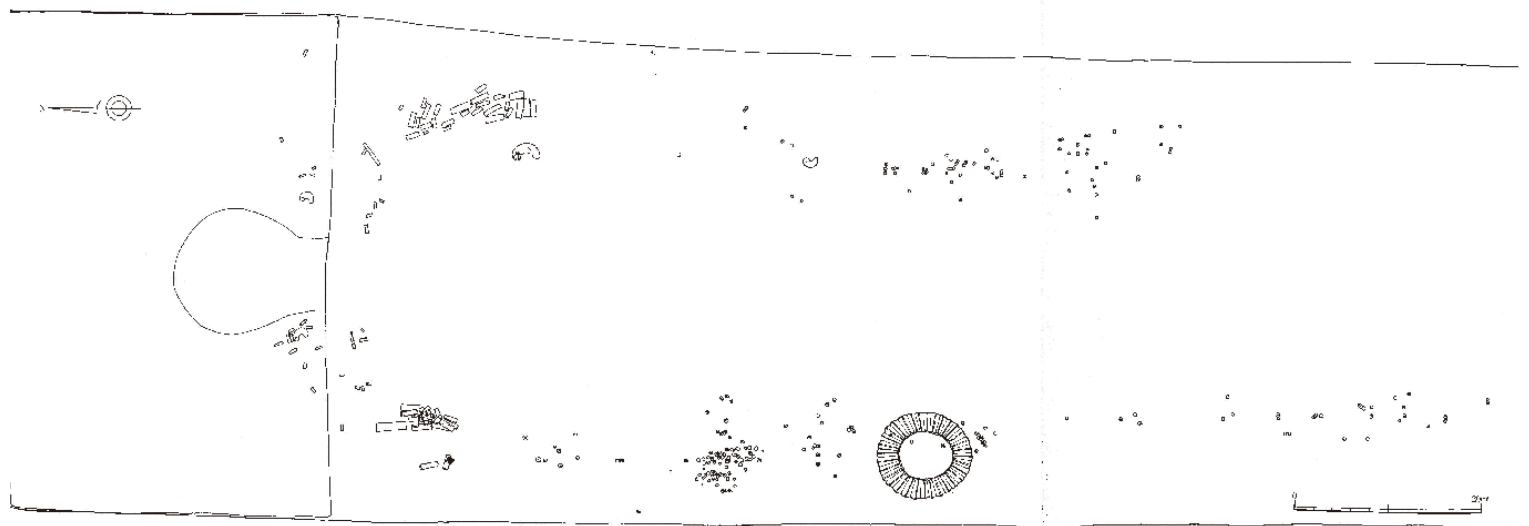
頭部両脇耳下辺から下顎骨辺へかけ、小形の勾玉2個と小形の管玉33個ずつそれぞれ散る。両上腕骨外側で右上腕骨上方では方格規矩鳥文鏡との間に一個所に寄った形で、左上腕骨上半分ほどでは腕骨に添った形で、比較的大きな管玉にわずか小さめな管玉がまじり、右側22・左側27個散っている。また左上腕骨上半分下方内側にやや大形の勾玉ただ1個があり、両下腕骨の外側では右腕外側に小玉数個が散り、左腕外側わずか1個しかなく、骨盤両側では左腕骨外側の小玉に続き70個余の小玉が一個所に散った形であり、右上腕骨に続く側では小形勾玉一個と数個の小玉、1個の三連玉が散っている。両大腿骨、脛骨外側で一方左脛骨辺まで小玉、三連玉が続くの他に他方は大腿骨辺に小玉、三連玉が散り、その先にはみられなかった。

なお小玉の破碎・分散したようなあとが8個所ほどあった。

上記の勾玉、管玉、小玉などの分散状態で気をつくことは胸部内に散ってはず、また上半身に集中して、ことに上腕骨外側に管玉などが目立ち、勾玉4個のうち3個がほぼ等間隔に散っており、頸から胸へ頸飾り状にかけられていたことが想像される。その頸飾が一連のものであったかどうか、検討を要する。

足の方まで小玉が散っているのは、棺内に散らしたものか、何の事情で散ったものか、疑問がある。

棺内壁の南側から長さ約60cm辺まで19個ほどの貝輪状の腐蝕した貝残欠が散乱していた。他の古墳にも貝輪副葬の例はあり、これら貝残欠は2枚貝や巻貝の残欠ではないかとみられる。ただ散乱した形が気になる。副葬の小玉などがかなり散っていることとともに注意される。



第14圖 玉 類 出 土 状 態

- 註 ① 北條暉幸九州産業医科大学教授（調査当時、熊本大学医学部助手）の鑑定による。
森浩一「語りかける出土遺物」邪馬台国のすべて、ゼミナール、朝日新聞社、1976
日本の古墳に、はたして女性だけを、あるいは女性優位の形で葬ったのかどうかよく問題になります。天皇陵の伝承では神功皇后とか、日葉酢媛とか、女性を葬ったと伝えるのがありますが、そういう伝承を別にしましても、いくつかの古墳からは女性の骨が、それだけか、あるいは合葬例でも優位の形で出ておりますから、女性のために築いた古墳があってもおかしくはないと思います。このことは将来の重要な課題です。
- ② 大阪府古文化記念物調査係「新たに学界に出た三島郡豊川村宿久庄紫金山古墳について」なにわ、1947
- ③ 小林行雄「福岡県糸島郡一貴山村田中銚子塚古墳の研究」便利堂、1952
- ④ 富田紘一「鹿本町周辺の古墳」鹿本町史、1976
- ⑤ 前掲書、Ⅱ章註⑦